

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20730359

研究課題名（和文） 戦後日本社会における〈老い〉と〈高齢化〉をめぐる表象と記憶の政治

研究課題名（英文） The Politics of Representation and Memory of Aging in post-War Japan

研究代表者

天田 城介（AMADA JOSUKE）

立命館大学・先端総合学術研究科・准教授

研究者番号：70328998

研究成果の概要（和文）：

研究成果として、第一に、戦後日本社会における老いの現代史を描くことができたことである。これによって戦後日本社会における高齢化をめぐる歴史的ダイナミズムを示すことができた。第二に、そうした知見を具体的な成果として発表した。平成 20 年度から平成 23 年度の 4 年間において、単著『〈老い衰えゆくこと〉の社会学 [増補改訂版]』、『老い衰えゆくことの発見』の 2 冊を刊行し、編著として、『社会学のつばさ』、『老いを治める』、『差異の繫争点』の 3 冊を刊行した。その他にも、共著・分担執筆の論文は 40 本、学術論文 40 本以上、書評・シンポジウム記録・その他が 50 本以上にもなり、この 4 年間で圧倒的な成果をおさめた。

研究成果の概要（英文）：

As the research achievements, first the project successfully depicted the modern history of <aging> in the post WW2 society in Japan. As the result, the historical dynamism related to <aging> in Japanese society after the WW2 was clearly presented. Second achievement is the publications of such knowledge as books and journals. During four years between 2008FY and 2011FY, two single authored books, "Sociology of 'Aging and Frailty' (Enlarged and Revised Edition)", and "Discovery of Aging and Frailty" were published, and three co-edited books, "Wings of Sociology", "Governing Aging", and "Disputed Point of Differences" were published. In addition to that, more than 40 papers were co-authored, more than 40 academic journals were published, and more than 50 other articles like reviews and symposium proceedings were written.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000 円	270,000 円	1,170,000 円
2009年度	900,000 円	270,000 円	1,170,000 円
2010年度	900,000 円	270,000 円	1,170,000 円
2011年度	600,000 円	180,000 円	780,000 円
年度			
総計	3,300,000 円	990,000 円	4,290,000 円

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：老い、高齢化、記憶、表象、社会政策、歴史社会学、戦後労働システム、社会保障システム

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、第一に、戦後の日本社会

における高齢者政策の歴史的文脈を俯瞰した上で、それらの歴史的・政策的文脈のもと

にあって、様々な高齢者関連団体・組織などをはじめとする各種団体・組織はいかなる活動・要求・異議申し立てなどの実践を行ってきたのか、そして、それらの団体・組織の実践を通じていかにして政策は変容してきたのかを実証的に明らかにするものである。第二に、そうした歴史的・政策的文脈と各種の団体・組織のせめぎあいを通じて、あるいはせめぎあいの中にありながらも、戦後日本社会の〈老い〉と〈高齢化〉をめぐる表象と記憶は形成されてきたのかを解読することである。要するに、私たちはいかにして戦後日本社会における〈老い〉と〈高齢化〉を語ってきたのかを明らかにする研究である。

こうした現代社会における高齢化や老いの現代史を、高齢者関連団体の動きと政策との関係から解読しようという試みはほとんど皆無であった。例えば、米国における高齢者運動の歴史——具体的には、1930年代のタウンゼント運動やマクレーン運動、1950年代における全国規模の各種運動団体の組織化、1960年代におけるそうした団体の要求によって成立した一連の制度と政策、そして1970年代におけるAARPやグレーパンサーなどによるステレオタイプ化された高齢者のイメージやエイジズムに対する批判などの、いわゆる「老人神話」の「脱神話化」の高齢者による社会運動といった高齢者運動の歴史——を記述した研究はあるものの、それを政策との結びつきから解明した社会学的研究は皆無である。とりわけ、本研究は、戦後日本社会における〈老い〉と〈高齢化〉をめぐる表象と記憶の政治を分析する我が国ではじめての研究であり、極めて重要な意義を有するものである。

本研究のように、たんに社会運動と社会政策の関連を「政策史」「社会運動史」の観点からではなく、戦後日本社会における労働システムと社会保障システムの視点から解明しようとしたところに本研究の最大の功績があると言える。

以上を踏まえ、本研究は、戦後日本社会における〈老い〉と〈高齢化〉をめぐる様々に語られてきた表象と記憶の政治性やそのダイナミズムそれ自体に着眼した企てであると同時に、まさに老いの現代史を通じてこれまでの社会学理論を書き換える研究になったものと確信するところである。

2. 研究の目的

先述したように、本研究の目的は、第一に、戦後の日本社会における高齢者政策の歴史的な文脈を俯瞰した上で、それらの歴史的・政策的文脈のもとにあって、様々な高齢者関連団体・組織などをはじめとする各種団体・組織はいかなる活動・要求・異議申し立てなどの実践を行ってきたのか、そして、それらの

団体・組織の実践を通じていかにして政策は変容してきたのかを実証的に明らかにする。第二に、そうした歴史的・政策的文脈と各種の団体・組織のせめぎあいを通じて、あるいはせめぎあいの中にありながらも、戦後日本社会の〈老い〉と〈高齢化〉をめぐる表象と記憶は形成されてきたのかを解読することである。要するに、私たちはいかにして戦後日本社会における〈老い〉と〈高齢化〉を語ってきたのかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究の目的である戦後日本社会における〈老い〉と〈高齢化〉をめぐる表象と記憶の政治を解明するためには、以下3点の具体的な研究方法が行われる必要がある。

第一には、広範かつ緻密な文献研究を通じてその言説と全体の構図を明らかにすることが不可欠となる。そのため、丁寧かつ膨大な文献研究の遂行を行った。これらは4年間にわたって継続的に遂行された。

第二に、過去における、あるいは現在における高齢者関連団体・組織へのインテンシブなフィールドワークを通じて当時のメンバーやスタッフが自らの老いと当該社会の高齢化について何をいかに参照しつつ語ってきたのかを明らかにした。

第三としては、「戦後」の日本社会における歴史的・時代的文脈を照射するために、「戦後」という文脈から国際間の比較分析を行うことである。とりわけ、戦後ドイツ社会や同じく東アジアにて未曾有の高齢化を遂げつつある韓国において、右肩上がりの経済成長とともに未曾有の高齢化を遂げていく社会にあってはミドルクラスの高齢者による要求・ニーズがせり出しながら、それらを汲み取った制度が設計されることを国際比較研究の観点からそれぞれの社会の特徴を解明するものである。

本研究は上記の3つの方法の全体的整合性のもとにおいて遂行された。

4. 研究成果

極めて乱暴にまとめると、本研究を通じて、戦後日本社会における老いをめぐる政策と歴史とは、未曾有の「高齢化」とともに、社会政策の対象は「身寄りの貧困の高齢者」から「ミドルクラス高齢者」に移行してきたこと、換言すれば、高度経済成長のもとで働き続けてくる中でストックもフローも獲得している高齢者が登場してきたこと——1970年代前半の高齢者による年金獲得運動などはまさにミドルクラスの中でも十分に年金を受け取ることができない高齢者によるニーズの主張であったこと——を解明した。

平たく言えば、戦後において次第に「多数派」になってきた「中産階級」の老いこそが

この国の老いをめぐる政策と歴史を形作ってきたことを解明した研究である。こうした歴史的ダイナミズムを戦後日本社会における労働システムと社会保障システムの観点から解明したことこそ本研究の最大の成果であると言える。

具体的には、「5. 代表的な研究成果」に記したように、この科学研究費が採択された2008年4月以降でも雑誌論文40件、学会発表20件、図書40件（単著5冊、共著・分担執筆35冊）であり、極めて生産的にその成果を公表することに成功をしてきており、当初の計画を遙かに凌ぐ進展を見せている。

特に、本研究課題の中心テーマである戦前ならびに戦後日本社会における〈老い〉と〈高齢化〉をめぐる政策と歴史の緻密な分析を単著『〈老い衰えゆくこと〉の社会学〔増補改訂版〕』（多賀出版、2010年02月28日）、『老い衰えゆくことの発見』（角川学芸出版、2011年11月20日）の2冊を刊行した。加えて、編著として、早坂裕子・広井良典・天田城介編『社会学のつばさ——医療・看護・福祉を学ぶ人のために』（ミネルヴァ書房、2010年03月10日）、天田城介・北村健太郎・堀田義太郎編『老いを治める——老いをめぐる政策と歴史』（生活書院、2011年03月25日）、天田城介・村上潔・山本崇記編『差異の繋ぎ点——差別を読み解く』（ハーベスト社、2012年3月10日）の3冊を刊行した。平成24年度にも単著として『老いの現代』『団塊世代高齢化論』を、共編著として『体制の歴史』を上梓する予定である。

その他にも、4年間で書評・シンポジウム記録・その他が20本以上にもなり、この4年間に圧倒的な成果をおさめることができた。特に、目的に即した形で成果をまとめることができており、飛躍的な研究の展開を示すことができた。

上記のことからも当初の計画以上に進展していると判断・評価することができる。

その理由として、第一に、当初の研究計画を超える研究の展開を示すことができていること、第二に、雑誌論文・学会発表・著書のいずれにおいても当初の予測を上回る数の成果をまとめることができていること、第三に、その成果は所属学会等に対してのみ発表しているだけではなく、拠点副リーダーを務めていた立命館大学グローバルCOE「生存学」創成拠点における成果としても広く発表・公開してきており、国際的水準に達するための更なる研究展開を示すことが可能になっていること、第四に、個人の研究として着実かつ発展的に研究を継続すると同時に、それらの成果を共同プロジェクトの研究会等にて報告することによって飛躍的に研究の質を向上することができつつあることが

挙げられる。今後も上記を踏まえて更に研究を発展的に展開していく予定である。

今後の研究の推進方策としては、引き続き現在の達成状況を踏まえて進めていくこと、雑誌論文・学会発表・著書のいずれにおいても更に多数の成果を示していくこと、立命館大学グローバルCOE「生存学」創成拠点（「ポストCOE」においては立命館大学生存学研究センターが研究を展開する）での活動と連動する形で、その成果を国際的に発信していくこと、今後も共同プロジェクトの研究会等の場にて報告することを通じて飛躍的に研究の質を向上させていくこと、などによって更に研究を推進させていく。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計42件）

- ①天田城介、「家族の余剰と保障の残余への勾留——戦後における老いをめぐる家族と政策の（非）生産」『現代思想』38（3）、114-129、2010年、査読無し。
- ②天田城介、「〈老い〉をめぐる政策と歴史」『福祉社会学研究』第7号、41-59、2010年、査読無し（依頼原稿）。
- ③天田城介、「社会学の問い方への問い」『ソシオロジ』167号、93-102、2010年、査読無し（依頼原稿）。
- ④天田城介、「日付と場所を刻印する社会を思考する——学問が取り組むべき課題の幾つか」『老年社会科学』32（3）、253-360、2010年、査読無し（依頼原稿）。
- ⑤天田城介、「「脆弱な生」の統治——統治論の高齢者介護への「応用」をめぐる困難」『現代思想』第37巻2号、156-179、2009年、査読無し。

〔学会発表〕（計20件）

- ①天田城介、「“セーフティネット”としての戦後日本型家族の変容」、第8回日本社会福祉学会フォーラム「社会的ケアについて考える——施設・地域・家族の観点から」、2012年3月10日、龍谷大学大阪梅田キャンパス（大阪府）。
- ②天田城介、「社会科学の主題としての団塊世代の老い」、日本老年社会科学会第53回大会ワークショップ「団塊世代の老い」、2011年6月16日、ハイアットエージェンシー東京（東京都）。
- ③天田城介、「ケアと承認をめぐる係争点——承認するなら金をくれ！で終わらないこと」、日本社会学理論学会第5回大会シンポジウム、2010年9月5日、長崎大学（長崎県）。

- ④天田城介、「制度を社会的に診断する—高齢者医療福祉実践の歴史と現在」、人間・環境学会 (MERA) 建築社会学を考える委員会主催研究会、2010年4月18日、大阪大学中之島センター(大阪府).
- ⑤天田城介、「〈古い〉をめぐる政策と歴史・素描」、福祉社会学会第7回大会シンポジウム『『共助』の時代・再考』報告、2009年6月7日、日本福祉大学名古屋キャンパス(愛知県).

[図書] (計40件)

- ①天田城介・村上潔・山本崇記編『差異の繋争点—現代における差別を読み解く』ハーベスト社、2012年、全298頁.
- ②天田城介、『古い衰えゆくことの発見』角川学芸出版、2011年、全254頁.
- ③天田城介・北村健太郎・堀田義太郎編、『老いを治める—老いをめぐる政策と歴史』生活書院、2011年、全530頁.
- ④早坂裕子・広井良典・天田城介編、『社会学のつばさ—医療・看護・福祉を学ぶ人のために』ミネルヴァ書房、2010年、全260頁.
- ⑤天田城介、『〈古い衰えゆくこと〉の社会学 [増補改訂版]』多賀出版、2010年、全683頁.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

天田城介ホームページ

<http://www.josukeamada.com/>

立命館大学グローバル COE「生存学」創成拠点のホームページにおける記載

<http://www.arsvi.com/w/aj01.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

天田 城介 (AMADA JOSUKE)

立命館大学・先端総合学術研究科・准教授

研究者番号：70328998